



## 「いざ鎌倉<sup>かまくら</sup>」って、どういう意味なの



「さあ、一大事が起こった」の意味だよ。

謡曲「鉢木<sup>はちのき</sup>」からきたことば

鎌倉幕府<sup>かまくらばくふ</sup>は、大事件が起こると、諸国<sup>しょこく</sup>の武士を鎌倉によび集めました。そのことから、「鉢木」という謡曲（能の曲）で、「さあ、鎌倉幕府に大事件が起こった、すぐにかかけなければならぬ時だ」の意味で、「いざ鎌倉」のことばが使われました。今でも、「さあ、一大事が起こった」の意味で使われています。

北条時頼<sup>ほうじょうときより</sup>の伝説から、「鉢木」の物語が生まれた

北条時頼には、執権<sup>しつけん</sup>をやめた後、僧<sup>そう</sup>となって諸国を回ったという伝説があります。謡曲「鉢木」の物語は、その伝説から生まれたもので、次のような内容です。  
上野国<sup>こうずけのくに</sup>（群馬県）の佐野（今は高崎市内）に、佐野源左衛門常世<sup>さのげんざえもんつねよ</sup>という貧しい武士が住んでいました。ある雪の夜、旅の僧<sup>ひとばん</sup>がやってきて、一晩とめてください、とたのみましたが、常世はことわりました。しかし、妻が、とめてあげようというので、思い直し、僧を追いかけて行って、連れもどりました。そして、アワのご飯をすすめたり、まきがなくなると、大切な鉢植えの梅・松・桜の木をいろいろにくべたりして、できる限りのもてなしをしました。いろいろにあたりながら、常世は僧に、一族に領地を取られたため、今は落ちぶれているが、「いざ鎌倉」というときには、鎌倉に一番にかかけつけて、命<sup>いのち</sup>をすてて戦うかくごだ、と話しました。翌朝<sup>よくあさ</sup>、僧はふたたび旅に出ました。

その後、鎌倉幕府から、集まれという連らくが来たので、常世は、やせ馬に乗って、鎌倉にかかけつけました。そこには、雪の夜にとめた旅の僧がいて、前の執権の北条時頼だとわかりました。時頼は、常世のことばがうそではなかったことのほうびとして、常世の領地を取りもどしてやり、また、大切な木をくべたもてなしのお礼だといって、梅田<sup>うめだ</sup>・松井田<sup>まきら</sup>・桜井の3か所の土地をあたえました。